

# 明るき世界へ

小川未明

青空文庫



## 一 小さな芽め

小さな木の芽が土を破つて、やつと二、三寸ばかりの丈に伸びました。木の芽は、はじめて広い野原を見渡しました。大空を飛ぶ雲の影をながめました。そして、小鳥の鳴き声を聞いたのであります。（ああ、これが世の中というものであるか。）と考えました。どれほど、この世の中へ出ることを願つたであろう。あの堅い土の下にくぐっている時に、同じような種子はいくつもあつた。そして、暗い土の中で、みんなはいろいろのこと語り合つたものだ。

「早く、明るい世の中へ出たいのだが、みんながいつしょに出られるだろうか。」と、一つの種子がいうと、

「それはむづかしいことだ。だれが出るかしれないけれど、あとは腐つてしまふだろう。しかし出土たものは、死んだ仲間の分も生きのびてしげつて、幾十年も、幾百年も雄々しく太陽の輝く下で華やかに暮らしてもらいたい。もし、二つなり、三つなりが、いつしょに明るい世界へ出ることがあつたら、たがいに依り合つて力となつて暮らしそうじやない

か。」と、他の種子が答えました。

みんなは、その種子のいつたことに賛成しました。しかしみんなが明るい世界を慕つたけれど、そのかいがなく、土の上に出ることを得たものは、ただ一つだけがありました。こうして、一本の木の芽は、この世界に出たが、見るもの、聞くものに心を齎かされたのであります。みんなの希望まで、自分の生命の中に宿して、大空に高く枝を拡げて、幾万となく群がつた葉の一つ一つに日光を浴びなければならぬと思いましたが、それはまだ遠いことになりました。

最初、この木の芽の生えたのを見つけたものは、空を渡る雲でありました。けれど、ものぐさな無口な雲は、見ぬふりをして、その頭の上を悠々と過ぎてゆきました。

木の芽は、鳥をいちばんおそれていたのです。それは、代々からの神経に伝わつてゐる本能的のおそれのようにも思われました。あのいい音色で歌う鳥は、姿もまた美しいには相違ないけれど、みずみずしい木の芽を見つけると、きっと、それをくちばしでつづいて、食いつき切ってしまうからです。そのくせ、鳥は木が大きくなつてしまつたあかつには、かつてにその枝に巣を造つたり、また夜になると宿ることなどがありました。そんなことを予覚しているような木の芽は、小鳥に自分の姿を見いだされないように、なるた

け石の蔭や、草の蔭に隠れるようにして いました。

口やかましい、そして、そそつかしい風が、つぎに木の芽を見つけました。

「おお、ほんとうにいい木の芽だ。おまえは、末には大木となる芽ばえなんだ。おまえの枯れた年老つた親は、よくこの野原の中でおれたちと相撲を取つたもんだ。なかなか勇士に闘つたもんだ。この世界は広いけれど、ほんとうに俺たちの相手となるようなものは少ない。はじめから死んでいるも同然な街の建物や、人間などの造つた家や、堤防やいつさいのものは、打衝つていつても、ほんとうに死んでいるのだから張り合いがない。そこへいくと、おまえたちや、海などは、生きているのだから、俺が打衝つてゆくと叫びもあるし、また、戦いもする。俺は、じつとしていることはきらいだ。なんでも駆けまわつていたり、争つたり組みついたりすることが大好きなのだ。」

木の芽は、まだ地の上に産まれてから、幾日もたたないので、ものを見てもまぶしくてしかたがないほどでありましたから、こう、風におしゃべりをされると、ただ空怖ろしいような、半分ばかり意味がわかつて半分は意味がわからないような、どきまぎとした気持ちでいたのであります。

「しかし、おまえは、大木になる芽ばえだとはいうものの、それまでには、おおかみに

踏ふまれたり、きつねに踏ふまれたりしたときには、折れてしまおう。そうすれば、それまでのことだ。だから体を鍛えなければならない。」と、宇宙の浮浪者である風は、語つか聞かせました。

哀れな木の芽は、風のいうことをともかくも感心して聞いていましたが、

「それなら、どうしたら、私は強くなるのですか。」と、木の芽は、風に聞いました。

風は、いちだんと悲痛な調子になつて、

「それには、俺がおまえを鍛えるよりしかたがない。いまおまえは、まだ小さくて教えても歌えまいが、いんまに大きくなつたら俺の教えた『曠野の歌』と、『放浪の歌』とを歌うのだ。」と、風は、木の芽にむかつていいました。

無窮から、無窮へ

ゆくものは、だれだ。

おまえは、その姿を見たか、

魔物か、人間か。

黒い着物をきて

破れた灰色の旗がひるがえる。

風は、歌つて聞かせました。そして、強く、強く吹き出しました。木の芽ばかりでなく、野原に生えていた、すべての草や、林が、驚いて騒ぎ出しました。中にも、この小さな木の芽は、柔らかな頭をひたひたとさして、いまにもちぎれそうになりました。

粗野で、そそつかしい風は、いつやむと見えぬまでに吹いて、吹いて吹き募りました。木の芽は、もはや目をまわして、いまにも倒れそうになつたのであります。

このとき、太陽は、見るに見かねて、風をしかりました。

「なんで、そんなに小さい木の芽をいじめるのだ。おまえが騒ぎ狂いたいと思つたなら、高い山の頂へでも打衝るがいい、それでなければ、夜になつてから、だれもいない海の真ん中で波を相手に戦うがいい。もうこの小さな木の芽をいじめてくれるな。」と、太陽はいいました。

風は、太陽に向かつて飛びつきそうに、空へ躍り上りました。そうして叫びました。私は、この小さな木の芽をいじめるのではありません。強く、強く、強くならなければ、どうしてこの曠野の真ん中でこの木の芽が育い立ちましょう。そうするには私が、木の芽を、強くするように鍛えなければならないのです。」

太陽は、あきれたような顔つきをして、しばらくぼんやりと見下ろしていましたが、

「私のいうことを守らんと、おまえを三千里も四千里も遠方へ追いやつてしまふぞ。これから、芽が大きくなるまで、おまえはけつして、あんなに烈しく吹いてはならない。」と、太陽は風に命じました。

風は、声低く、「放浪の歌」をうたいながら、海の方をさして去つてしました。  
あとで、太陽は哀れな木の芽をじつとながめたのであります。

「もう驚くことはない。おまえを苦しめた風は遠くへ去つてしまつた。これから後は、私がおまえを見守つてやろう。」と、太陽はいいました。

木の芽は、生まれて出た世の中が予想をしなかつたほど、複雑なのに頭を悩ましました。そして、空恐ろしさに震えていました。

「おまえは寒いのか。なんでそんなに震えているのだ。」と、太陽は、怪しんで聞きました。

木の芽は、風に吹かれて、体がたいへんに疲れました。そして、のどがこのうえもなく渴いていたので、ただ雨の降つてくれるのぞとを口に出していくもされずに、不安におそわれて震えていたのです。

「かわいそうに、おまえは、ものがいえないほど寒いのか。それで、震えているのだろう。

もう安心するがいい。風は、あちらへいつてしまった。私が、おまえを思いきつて暖め  
てやるから。」と、太陽はいました。

そして、太陽は、急に熱と光をしました。その熱は雲を散じてしました。そして、やつと地の上に伸びたばかりの木の芽は、小さな葉がしほんで、細い幹は乾いて、ついに枯れてしまいました。

太陽は、そのことには気づかず、日暮れ方まで下界を照らしていました。

## 二 幸福の島

ある国にあった話です。人々は、長い間の版で押したような生活に疲れていきました。  
毎日同じようなことをして、朝になるとはね起きて、働き、食い、そして日が暮れると  
眠ることにも飽きてしました。

みんなは、仲よく暮らすことを希望していましたけれど、どうしても、このことばかり  
はできなかつたというのは、ある人がたくさん金がもうかつたときには、一方ではまた  
たいへんに損をするというようなぐあいで、みんなの気持ちがいつも一つではなかつたか  
そん

ら、怒るものもあれば、また喜ぶものがあり、中には泣くものまた笑うものがあるというふうで、その間に嫉妬、嘲罵の絶える暇もなかつたのでありました。

「ああ、なんで俺たちは、産まれてきたのだろう。産まれたかいがないというのだ。毎日、こんなような同じことを繰り返して死んでしまわなければならぬのか？」と、人々はため息をついでいいました。

春になると、花が咲きました。ちょうどその国全体が花で飾られるようにみました。夏になると、青葉でこんもりとしました。そして、秋がくる時分には、どこの林も、丘も、森も、黄色になつて風のまにまにそれらの葉が散りはじめました。冬が過ぎ、また春がめぐつてくるというふうに繰り返されたのであります。

この国には、昔からのことわざがありまして、夏の晩方の海の上にうろこ雲のわいた日に、海の中へ身を投げると、その人は貝に生まれ変わる。また、三年もたつと、海の上にうろこ雲がわいた日に、その貝は白鳥に変わつてしまふ。白鳥になると自由に空を飛ぶことができる、白鳥は遠い、遠い、沖のかなたにある「幸福の島」へ飛んでゆくというのであります。

「幸福の島があるというが、それはほんどうのことだろうか。」

ある人が、この国でいちばん物知りといううわさの高い人に向つて問いました。物知りはもうだいぶ年をとつた、白髪のまじつた老人であります。

「それはほんとうのことだ。幸福の島へゆけば、いまこの国でまちがつてているようなことは、たとえ見ようと思つても見られない。そのうえ、山へゆけば木がしげつていて。土を掘ればいい水がわいてくる。岩を破れば、金・銀・銅・鉄などが光つていて。野原には花が咲き乱れ、田や、畠にはしぜんと穀物が茂つていて。そこへさえゆけば、人は眠つていて樂に生活がされるから、たがいに争うということを知らない。ただ、しかしその幸ふくしまの島へいくのが容易でない。波が荒いし、恐ろしい風が吹く、また、深い海の中には魔物がすんでいて、通る船を覆してしまう。だれも、まだその島にいつたものがないが、しまには、人間が住んでいるということだ。また幸福の島の女は、天使のように美しいといふことだ。昔から、その島へいってみたいばかりに、神に願をかけて貝となつたり、三年の間海の中で修業をして、さらには白鳥となつたり、それまでにして、この島に憧れて飛んでゆくのであつた。白い鳥は、その島にゆくと、花の咲いている野原の上で舞うのである。またあるときは、いつも緑の色の変わらない林の中で歌い、あるときは、美しい女の肩に止まつて愛されもするというが、じつに不思議なことだ。」

「なぜ、こんな不思議な話をもつと早く、みんなに聞かせてはくださらなかつたのですか。」と、老人に向かつていいました。

「こういう話は、世の中を騒がせるものだから、あまりしないほうがいいと思つたのだ。」と、物知りは答えました。

この話は、いつか国じゅうに伝わり広まつたのであります。

生に興味を失つてゐる若い人々の中では、毎日うなだれて沈んでいるものもありましたが、一命を賭けても、幸福の世界を見いだしたいと思つたものもありました。そして、夏の日が海のかなたに傾いて無数のうろこ雲が美しく花弁のように空に散りかかるたびに、身を投げて死んだものもありました。

こうして、死んだ人々に対しては、だれも悲しいというような感じを抱きませんでし  
た。このままこの国に朽ちてしまつて土となるよりは、生まれ変わつて幸福の島へゆく  
ことがどれほど楽しい愉快なことであるかしれなかつたからです。

そして、海の中に身を投げて死ぬほどの勇気もなく、いたずらに、醜く年を取つて木の

枯れるように死んでしまうことが、その美しい死に較べたら、どんなにか陰氣で、また暗い事実でありましたでしょう？

ひが沈むころになると、毎日のように、海岸をさまよつて、青い、青い、そして地平線のいつまでも暗くならずに、明るい海に憧れるものが幾人となくありました。海は、永く久にたえず美妙な唄をうたつています。その唄の声にじつと耳をすましていると、いつしか、青黒い底の方に引き込められるような、なつかしさを感じました。まれには、月の光が、波の上を静かに照らす夜になつてから、感がきわまつて、とつぜん海の中に身を躍らしたものもあつたのです。

生まれ変わるという信仰が、どれほど味ない生活に活気をつけたかしれません。「死」ということがこんなに、このときほど意義のあることに思われたかわかりません。「死なずに幸福の島へ渡れないものだろうか。」

多くの人々の中には、身を海に投げてしまつて、はたして、ふたたび生まれ変わるだろうかという疑いをもつたものもおります。その人々は死なずに、どんな冒険でもやつてきて、その島へたどり着きたいものだと思いました。そして、そのことを年よりの物知りにたずねました。

「ゆけないこともあるまいが、なにしろ遠い。その島へ渡るまでには怖ろしい風の吹いているところがある。また、大波おおなみの渦巻うずまきいているところがある。魔物まもののすんでいる深い海かずらうみをも通らなければならない。その用意よういが十分ぶんできるなら、ゆけないこともないだろう。」と、なんでも知つている老人ろうじんは答こたえました。

かんがぶか考かんがえ深ふかい、またおくびょう臆おくび病びょうな人ひとたちは、たとえその準備じゅんびに幾年費いくねんついやされても十分ぶんに用意よういをしてから、遠とおい幸こうふく福ふくの島しまに渡わたることを相談そうだんしました。

それからというものは、みんなは働くことに張り合ははいを得ました。あるものは、海うみを渡わたる船ふねについて工夫くふうを凝こごらしました。あるものは、いろいろな器具きぐについて考かんがえました。たあるものは、その島しまについてからのことなどを研究けんきゅうして頭あたまを悩なやました。しかしその悩みは、行く末すえの幸福こうふくを得ることのために愉快ゆかいでありました。早く、その未知みちの島しまにゆきたいものだとみんなは心こころで思いました。どんな困難こんなんや辛苦しんくがこの後のちあつてもそれを切り抜ぬけてゆこうという勇氣ゆうきがみんなの心こころにわいたのであります。

太陽たいようは、赤あかく、暮れ方くがたになると海うみのかなたに沈しづみました。そのとき、炎ほのおのように見えみる雲くもが地平線ちへいせんに渦巻うずまきいていました。

「幸福こうふくの島しまは、あの雲くもの下したのあたりにあるのだろう。」と、みんなはその方ほうを望のぞみながら

ら、いいました。やがて、日がまったく沈んで、空の色がだんだん暗くになると、地平線は波に洗われて、雲の色の消えてゆくのを惜しんだのであります。

ある日のこと、人々がいつものごとく、海岸に立つて沖の方をながめています。そのとき、なにか一つ黒い点のようなものが、夕空をこなたに向かつてだんだん近づいてくるように見えたのであります。みんなはしばらく、目をみはつてそのものに気をとられていました。

「あれは、なんだろうか。こちらに向かつてこいでいるようだ。」

「幸福の島から、船をして、こちらの国へやつてきたのではないか。」

「なんにしても、いまに着いたら、すこしぐらい沖のようすがわかるだろう。」と、みんなは、くびを差し伸ばして黒いもののこの岸に近寄るのを待つていました。

だんだんとその黒いものは近づいたのであります。すると、小さな船で、それには三人のものが乗つていたのであります。すると、ふねみぎわつた。船から下りた三人のものは、目ばかり鋭く光つて、ひげは黒く、頭髪はのびて、ほとんど、骨と皮ばかりにやせ衰えていたのです。

「みんな俺たちの顔をば忘れてしまつたろう。十年ばかりまえに沖へ出て、大風のため

に遠くへ流されたものだ。」と、その中のいちばん背の高い男がいました。

人々は、十年ばかり前にあつた大暴風雨の夜のことを見出しました。

そして、三人のものがいまだに行方不明であることを思い出したのであります。

「よく帰つてきた。もうみんなは死んだものと思つていた。おまえたちは、幸福の島にでも救われていたのか？」と、群集の中から、一人がいいました。

「幸福の島？」と、そのとき、三人の中一人が、自分の耳を怪しむように、大きな声で聞き返しました。

「そうだ。幸福の島に長い間、住んでいたかと聞くのだ。」と、群集の中から一人が答えました。

「ばかにするのか？ 地獄から、やつと逃げ出してきた俺たちに向かつて、幸福の島とはなんのことだ？おまえがたは、久々で帰つてきたものを侮辱するつもりなのか。」

と、三人は、青い顔をして怒りました。

みんなは、意外なできごとに驚いて、三人をやつとのことでなだめました。

「ちょうど、ここから見ると、あの太陽の沈む、渦巻く炎のような雲の下だ。その島に着くと、三人はひどいめにあつた。朝から晩まで、獣物のように使役された。俺たちはど

うかしてこの島しまから逃に出だしたいものだと思おもつたけれど、どうすることもできなかつた。日ひが暮くくれると海辺うみべへ出でては、火ひをたいて、もしやこの火影ひかげを見みつけたら、救すくいにきてはくれないかと、あてもないことを願ねがつた。三人は、ついに丘おかの上の獄屋ごくやに入れられてしまつた。そして、長い間ながあいだ、その獄屋ごくやのうちで月日つきひを送おくつたのだ。たまたま月の影つきかげが、窓まどからもれると、その月を見て遠い海うみのかなたのふるさとをしのんだ。ある晩ばんのこと、三人は、その窓まどから逃に出だした。そして、ようようの思おもいで、助たすかつてここまで逃にげてきたのだ。」と、三人は、くわしく物語ものがたりりました。みんなは、年寄りの物知りにあざむかれたことを憤いきどおりました。

「ああ、俺たちはばかだつた。あの老人が、自分でいきもしない『幸福の島』などと  
いうものを知つてゐるはずがなかつたのだ。あの老人を、だれがいつたい物知りなどと  
いつたのだ。そして、あの老人のおかげで幾人海の中へ身を投げて死んだかしれない

L

みんなは、老人を海岸へひきずつてきました。そして、みんなをあざむいたことをなじりました。すると、老人は、案外平気な顔をしていました。

昔は、『幸福の島』だつたのだ。しかし、それがいま『禍の島』に変わつてしまつた

のだ。それをだれが知つていよう。けつして、私の罪じやない。」

けれど、みんなは老人のいうことを承知しませんでした。そしてついに老人を三人の乗ってきた小船に乗せて、沖の方へ流してしまいました。みんなは、これで復讐がとげられたと思いました。もうこれからは、みんな物知りなどというものがいなくて、この国の人々が迷わされる心配のないのを喜びました。しかし、そうした喜びもつかのまのことありました。

みんなは、また、前のように生きている望みを失つてしまいました。なんのために、自分らは、こうして味気ない生活をつづけなければならぬのか。  
「禍の島でもいいからいつてみたい。」といつて、まれには船を押し出していくものもありました。

未知の世界に憧れる心は、「幸福の島」でも、また、「禍の島」でも、極度に達したときは変わりがなかつたからです。とにかく、みんなは、たがいに欲深であつたり、嫉妬しあつたり、争い合つたりする生活に愛想をつかしました。そして、これがほんとうの人生であるとは、どうしても真に信じられなかつたのであります。





## 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

※表題は底本では、「明《あか》るき世界《せかい》く」となっています。

入力：ふろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2012年9月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

# 明るき世界へ

## 小川未明

2020年 7月18日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>